



保護の対策

北海道の自然公園

橋本昌利

私は、現在ロープウェイで有名になってきた湧駒別を管理している旭川林務署に在職していたし、生来、山の好きな性格なので、自然保護のことはかなり関心をもっていたものである。

このシーズンから層雲峡のロープウェイが運行を開始し、現在環境づくりをやっているが、大雪山のムードを出したなにか特徴を持たしたものである。

「石北峠」にはたくさんのお店が出ている。オデンなども売っている。なにも、あそこでオデンを食べなくてもよいではないかとも思うが、われわれとして考えなければならぬことは、客が多勢いるという事実である。そればかりではない。いまブームの石とか、アカエゾマツなども売っている。やはり需要があるからであろうが、層雲峡や湧駒別のロープウェイの駅でも、やはり、大きく浮かびあがってくる問題とと思う。

湧駒別のロープウェイは、ことし第一段目を完成し、明年は全線開通の予定になっているようだが、こうなったらどういふことになるであろうか。高山地帯の保護ばかりでなく、冬のスキーヤーの事故防止にも大きな問題がありそうだ。現在の日本では、便利になればなるほど、危険はつきものである。高山植物の維持について、例を

「赤岳」にとつて考えてみよう。

あそこは、営林署が非常にきびしく取締っている地区である。「銀泉台」の小屋には、つねに三名は監視員が配置され、七月二十日から六名になるそうである。

「赤岳」が名乗りをあげたのは、三十五年頃だと思ふが、その後数年で、ずいぶん荒れてしまったものである。写真はその荒らされた第一花園であるが、一面ツガサクラ、キバナシヤクナゲなどがあつたところが、いまでは泥の露出がいたるところにできている。

ここは密採だけではないようである。本当の登山道はべつにあり、何回も行って私にも気づかないような状態である。ことしては、その登山道を歩くように垣根をしつてしまうようであるが、少しはよくなるかも知れない。「第一花園」までの林間歩道は、昨年、金をかけて全線補修をしてあるが、あれだけ気を配るのなら、なぜ「第一花園」を先にやらなかったか。

悪く考えれば、花園などを忘れていてもいいかも知れないのではないだろうか。なるほど、下の林間歩道も悪かったが、なぜもうほんの少し延ばして「第一花園」の歩道も合わせて考えなかったかと思う。あそこは、ゾンメルシーが六月いっぱいできるところである。

雪線の関係でスキー客に踏まれるだろうから、じゅうぶんそのへんの事情も加味して、対策を講じなければならぬと思う。

同じような例として湧駒別の第一、第二「天女が原」の湿原地帯がある。現在は歩道が二〇メートルにもなってしまうているが、人が少いとあんなにはならないだろうし、少し横に傾斜地があり、そこを通していたらと思う。今後、登山道の選定には、この尊い経験を生かしたいものである。

「雨竜沼」の場合も湿原内ばかりでなく左の山側に、もう一本歩道があったほうがよいのではないかと思う。雨のときとか、人によつては、上から眺めたい人があると思う。そうすれば、沼間の現在の登山道はもつとよくなるのではあるまいか。

「赤岳観光道路」を現在延ばしている。どこまで延びるかは別問題として、その終点からは必ず登山道ができることになるだろうが、そのときには、これらの経験を生かしてもらいたいものである。

赤岳コースで、いまのうちに考えなければならぬ地区として頂上下の湿原である。

「緑岳」との岐れ道の少し上のところであるが、現在人もあまり多く通らないので荒れていない。だが、観光道路がかなり上まで上がるようだから、そうすると、頂上までの客が非常に多くなり「第一花園」の

二の舞いとなるであろうことは、自明のようない気がする。少しく横に寄せれば、岩礫地があるのである。

「第二花園」の少し上部に、「コマクサ平」がある。何十haとあるコマクサ群は非常に貴重なものと思うが、三十六、三十七年ごろは、登山道のすぐ脇にいくらか花が見られたものが、現在は二、三〇メートルも横にはいらねば見られなくなってしまった。あそこも、いまのうちににか手を打たなければならぬと思う。いまやっている「観光道路」は、このコマクサ平の一角まで行くそうである。そうならば、またその方向から荒れてくるかも知れない。「自然保護協会」で、じゅうぶん監視の必要があるだろう。

赤岳の例をみて心配になるのが「湧駒別のロープウェイ」である。層雲峡のほうは山上駅が森林の中で登山道も一本だから、監視も比較的楽なようだが、湧駒別の場合、上も下も広いうえに、登山道はべつな沢だし、監視の範囲も非常に広くなりそうである。

「裾合平」の非常によい高山植物地帯を通過して、案に下れる松仙園口と愛山溪口がある。この方面にも併行して、監視を厳重にしなければならぬ。道有林当局、地元観光協会などじゅうぶん協議して、万

全の策を考えてもらいたいものである。現在は阿入口とも、いわゆる穴となっているらしく、密採プロなど、一回担げば何万円にもなるそうだから、もっぱら利用しているというのである。

緑は人の心に、平和と平静と柔和と純情と安全を呼びかけるそうである。国道にグリーンベルトがあったら、自動車の運転者の心はだいぶ休まり、事故も減るのではないだろうか。

北大の構内も、拡張でやむをえなかったかも知れないが、緑の少くなったのはなんとなく寂しいような気がする。ポプラ並木が風害で痛められたようであるが、今度は「恵迪寮」横の原始林もなくなったと聞いた。構内は広いのに、どうしてだろうと思議に思われる。

車で北見に行くときによく見せられるがイトムカの横が鉱害でひどく殺風景になっている。有名な水銀鉱だから、あれくらい致し方ないといってしまうばそれまでであるが、やはりなにか、見る者の心に寂しさを感ぜさせるものがある。

旭岳の石室が落書きで、もう書くところがなくってしまった。おそらく、マジックを持ってくるのであろう。山小屋とか岩

には、落書きをするべきものと考えているらしい。落書きとは思っていないく、記名だからかまわないと思っているようである。附近は空缶、残飯、紙屑で山となり、まことに見苦しい。「姿見の池」畔は飯粒でできなくなっている。ハイマツは無残に伐り荒され、一山坊主になってしまった。

現在でもこんな状態だから、ロープウェイができたらどんなことになるのであろうか。実行できる対策を講じなければならぬ。

山上駅から「裾合平」を縦断して「当麻乗越」までの間は種類こそ多くないがもの凄く高山植物で、それがたくさん凹凸した岩石とくまなく調和して、ほかでは見られないような景観である。これらを維持するのに、また一苦労があるわけである。

一般には、山に登れば高山植物を持つてくるのは常識になっている。八月に採ってきたから、活着したとかしないとか議論しているのを聞いたことがある。それが有名な観光地からであり、取締りも厳しいはずなのに。

現在の日本では、施設ができれば高山植物は荒れるのは当りまえである。致し方ないだろうということになっている。施設はほとんど作らねばならないのだから、という前提をしているようである。ロープウェイ

イ、スカイラインなどは今後あちらこちらに計画されるであろうが、経営と自然保護はじゅうぶん加味した計画でなければならぬという感覚を、施設の経営者や地元市町村が、もっとしっかり持ってもらいたいものである。また、もっとも山に関係の深い林業関係者もそうではないだろうか。

何々地方開発期成会なるものが、盛んに観光道路誘致に努力しているようだ。これは地元の市町村の集まりだが、荒れてしまえば再生したいことを意識しているのだろうかと疑いたくもなる。

札幌や函館の駅前に、いろいろな高山植物を売っている。「お客さま、これは大雪物ですよ」「阿寒からきたんですよ」と威張られるのは弱い。さらにつつこんで聞いてみると「私は売るだけだから、それ以外のことは知りません」と逃げられる。

公園区域外の山にもないわけでもないだろうが、その山の持主が、自由採取を認めたとも思えない。これは一体どうしたことだろうか。

大雪山のロープウェイも赤岳の観光道路も、天然破壊を意図しての計画でないことは判る。しかし、高山植物のない岩山を、誰しも望んではいないと思う。高山帯が荒れても、事故にはならないだろうが、実際は大変なことである。

七月末に三日間、立山連峯を、八月に蔵王のスカイラインを主体にしたことで、また、中旬に大山のことをテレビでやっていった。立山と大山は、塵芥整理のことをチョッピリとりあげてただけで、その塵芥発生について、高山植物維持については、まったくふれていなかった。高山植物については少し前に、レンジャーのことをとりあげていたから、もうよいと考えたのかも知れないが、現在の風調からいって、あらゆる機会をつかんでやかましくPRしなければならないのではなからうか。日光に、国立公園管理事務所のある「尾瀬ヶ原を守る計画」などもとりあげられているようである。非常にうらやましいことと思う。

このような現況下で、ではどうすればよいかということになる。私の考えでは、法をもっと強くする。国民の公德心の高揚につとめるのももちろんであるが、とりあえず一つの具体的方策は、その持主がもつと自衛的に、積極的に対策を講ずべきだと思ふ。さいわい公園のほとんどは、国有林か道有林である。林野の管理規定があるはずである。それに、その方面の担当者がより動きやすいように規定すべきではないだろうか。

反省してみるに、私も森林官の一人として、高山帯の維持については、いままでも、関心はなかつたように思う。これは森林官全体の感覚ではないかとも思われ、一番関係の深い職だけに、もっと関心を持つべきではないかと思う。

最近では、全国的な観光ブームの時代になってきたのだから、採算は必ずしもとれなくとも、なにか観光的な事業を考えてみるのも一つの方法であらうし、また、入林税的なものをとる方法も考えてもよいのではないかと思う。

層雲峡のロープウェイの駅で感じたことだが、なにか高山植物のようなものを販売できないものかということである。現在は下界と同じようなアイヌ彫り、牛乳、センベイなどが置かれているだけで、山の上の売店としては、なにかもの足りない感じがする。また、一般大衆の心理状態からしても、高い山へきたのだという、なにかのものを求めているように思う。

そこで考える一つの方法として、高山植物類の販売ということである。高山植物の栽培は容易でないとは思ふが、とりあえず楽なものからはじめることである。ハイマツ、アカエゾ、クロエゾ、カエデなどをジューボックスなどに入れて売るのもよいし少し手をくわえるとすれば、いまはやりの

シンパク、五葉松のように、針金でコジラせることもできると思う。

また広い鉢に、多孔質の石を配置して、数本直立させる盆栽など、少しぐらい高価でも、土産として売れるのではないかと思う。シャクナゲの実生は、数年で三〇センチぐらいにはなると思う。ツツジも同じだろう。ムラサキツツジは、挿木で八〇％は活着するというのである。これらを作り上げるのもよいのではないかと思われる。

先日、黒岳から降りてきたら、登ってきた中年の四組の夫婦に七合目あたりで出遭った。これ以上は登れないとあきらめていたらしい様子であったが、降りはじめるときにいった言葉がふるっていた。

「ここまで登って、お土産はなにもないのかい」

これが大衆の考え方ではないだろうか。林業関係の雑誌に、高山地帯の維持管理についてのことは、あまりでていないようだ。そろそろこの面の研究を進めてもよいのではないかと思われる。高山植物栽培は林業技術の一部門である、とみてもよいのではないだろうか。園芸家にまかせておくだけでは、自然保護は進まないかも知れない。林業家が、もつとこの点に意を用いてもよいように思う。

(道生物保護指導監)